

重修真書太閤記 十一編 三

晴

實傳

和書門		
三四〇五三	二六	四〇
號	函	冊

內閣文庫		
三四〇五三	四〇	七一
號	冊	函
類	書	和

第七

新刊納本

共四十

內閣文庫		
番號	和	34053
冊數	40 (32)	
函號	171	45





重修真書大閤記十一編卷之四

八丈嶋由來の事

并村田久兵衛物語乃事

北條早雲氏綱氏康氏政四代相續して百餘年關八
 箇國伊豆駿河を領して去りハ威風の至らぬ處ハ
 中ノ南海をばりみ隔て八丈といハ嶋あり此
 嶋ハ伊豆の地より伊勢に近しとおそそり其故
 空静なる時此嶋より見え日くはみ西に當りて
 雲たむびく山あり或ハ伊豆へ乘らんとして誤て
 鳥羽熊野へ漂着し其處より又嶋へ乘歸るおとら

河庄ハなり。此嶋周十里十三町十間二尺。南北七里
餘東西三里餘伊豆國下田より己の方み當り海上
六十四里むろの沖の嶋といひ由百練抄み足
えくろ箭竹嶋女護嶋女國女人國と云春夏秋ハ
あはれ冬ハあるかや鎮西八郎為朝此嶋に渡
足嶋の長者の壻として男子を産しむ島冠者為頼
同次郎為家かと云く人みや西山の麓に館作す
く住むひいとけり。永万元年乙亥三月鬼界嶋にお
しわくろ其嶋みくも長たる者の壻とあり。あくれ
ハ仁安元年丙戌男子を産むこれ琉球の舜天王源
尊敦と申されあり。為朝ハまぐ八丈に歸り安元

三年三月六日戦死あり。今西山の麓に入道
宮と云是ありとかや為朝より五代相續して嶋の
長たりしか。六代の孫雲加入道といふ時み當り
康正二年十月十四日左衛門太郎に降参し僧とか
足端翁宗的と云といひ。是ハ金川宗麟嶋をとり
左衛門太郎を渡さその子奥山八郎五郎宗圓と云
三十餘年嶋の代官たり。朝比奈に渡り是より
伊豆の嶋とあり。北條の持と以東壁錦封龍泉美記
と云印を絹へ捺すかやと嶋の舊家奥山某と
家記み足ゆるとかや但嶋の宗福寺の舊記にハ金
川宗麟と同時に渡る人即宗福寺に開基し觀峯山

宗福寺といふ。又ハ香爐山弥陀寺といふ云。永享十二年。金川宗興寺を請ふ。住持といふ。端翁宗的ありといへり。康正二年。僧とあり。一人あり。宗福寺過去帳。宗的信士。天正元年七月三日とある人みやといふ。康正二年より百八十年後。おの別人なるへ。或ハ康正二年と云り誤。端翁宗的より二世三世四世ハ詳ならず。五世を用順和尚と云。天文五年より十年住持。六世養真淳淳。跡和尚。天文十五年入寺。この時より妻帯とあり。十二年住持。七世靈誓宗游。永禄元年入寺。この時。浄土宗に改め。といふ。又嶋の舊家菊池氏の閨基

せし。長樂寺ハ舊岡の里の大善寺なり。大善寺過去帳。住持明誓勢遍ハ觀應元年十月朔遷化といひ。次ハ清誓源榮といふ。至徳三年二月十三日。といふ。次ハ靈誓宗開といふ。明人あり。とかや。應永廿一年七月十五日。とあり。文歸真林氏朝章大公壽位。て正中。六親眷属有縁無縁三界万靈と記。その次。同陽氏先親大婦靈位とあり。其裏。明徳三年壬申十一月初四日。漂流悪風受難。來到嶋。卅一人。同四日夜。即死。畢。同年餓飢病。四十五人死。畢。以上三百七人と記。明徳四年ハ。明の洪武廿六年形。す。此寺。此地藏大菩薩。昔金川宗麟と申人。當嶋。子至

申されし此内の書付子此地藏於破滅者八丈嶋可
 断滅といふ書付有之然も中代及破滅百有餘年菊
 池采女義武二人為父母并現世安穩後生善所之為
 再建此外當所之檀那衆寄合毎年夏秋廿四日子祭
 尊むべきなり仍為末代書付畢寛永十一年二月
 持主菊池采女義武筆取宇喜多秀家作者佐久良勝
 大夫と有り寛永十一年より百有餘年といへとも
 享禄天文の間をいふ然れとも奥山大和崇祀る
 寶明神唐銅神体の銘も天長地久國土安穩宗興寺
 御慎于末代可有鎮護永享十一年己未卯月廿日宗
 麟判とあれし宗麟ハ永享中の人なること疑ひか

康正二年より十七年までは八丈嶋を取て奥山左
 衛門太郎を代官とせしあるへし然るも文明十八
 年八郎五郎國へ出る嫡子新五郎子嶋を渡し候る
 難風もあふと云記もあり左衛門太郎八郎五郎と
 改めし又ハ左衛門太郎の子を尋へし此新五郎
 明應六年まで十二年の間代官たりし明應六年
 の條も夏天氣よし世上富貴なり九月九日大風此
 時代官奥山新五郎國入り候ひ十月廿六日死を七
 年奥山八郎五郎代官も渡り年貢神奈川へ納る八
 月十三日新嶋入り難風長戸路七郎左衛門代官も
 渡るとあり嶋の役人長戸路系圖も長戸路七郎

左衛門真敷の田原藤太秀郷の後胤なり。明應七年
 早雲代官とて廿五人あり渡る。同八年歸國。永正
 六年より勤めたり。同七年子息真隆継て代官とる。
 同十一年奥山八郎五郎忠茂北條の代官とある。
 とあり然しは神奈川と北條と二方あり。永正十年
 より領ありとて十一年よりより全く北條の領とあ
 り。と聞ゆ。同十二年四月十八日奥山八郎次郎忠
 督をよひ三浦介義同代官三浦弥三郎利重新嶋へ
 着十九日合戦し真隆戦死とあり。より長戸路より舊
 記より永正元年閏二月十日雪降幾年よりあり。より
 て人々不思議かり。よりかや同三年四月七日長戸

路渡海し。めり種を乞得て五月十五日に歸嶋せ
 し。となり。同七年此年代官八郎次郎の嶋三郷小嶋
 中の郷の弥三郎青ヶ嶋の太郎三郎とあり。同九年
 嶋の代官左衛門次郎とあり。めりの下田へ渡り嶋の
 ことを訴へけり。より早雲入道の氣は違ひ。かは下田
 を去り行衛し。より因て朝比奈藤兵衛と云ゆのや
 代官とあり。より五月廿八日嶋へ着藤兵衛と
 一びし。嶋中用心のため鎗を打て牛の皮より具
 足をあり。より船二艘作り。より敵寄り來らに
 同十一年二艘の船より國へ出た敵方より十三艘
 より追かくは去と。より二艘三浦へ着導守へ年貢を

上る。當嶋の代官大嶋へ乗とちり早雲の代官駿河
 圓明といひ。老大將二百許の勢あり。夜討り寄る取
 あえは落て。三浦へ行八郎次郎弟八郎五郎小嶋の
 三郎次郎大嶋ふく。生捕せ。早雲方へ見参み入。八
 郎五郎嶋の代官請取圓明の方より下知りて。太
 郎次郎八郎五郎十月十日嶋へ入。八郎次郎ハ三浦
 小あり嶋を如元八郎五郎太郎次郎太六郎三郎船
 頭弥六郎とあり。より嶋困窮をとり。とる。より十
 二年の條。四月十八日。三浦より八郎次郎弥三郎
 三艘よて嶋へ入。十九日合戦。太郎次郎弥六六郎三
 郎船頭彦次郎討る。八郎次郎方より。西村與次郎以

下四人戦死を。五月より互に用心。以早雲の代官圓
 明十二艘ふく。著一艘ハ國へ戻る。
 八郎次郎といひ。奥山忠督のとり。弥三郎ハ
 三浦導寸の代官。三浦利重なり。
 合戦あり。扱みある。圓明年貢を岡郷ふく。請取六月
 十五日歸國を代官八郎次郎船頭ハ嶋ふく。殘し。三浦
 の代官船頭弥三郎を生捕り。國へ出。十九日船頭
 彌三郎を國みて。討首ハ早雲へ上る。十三年圓明の
 使船より。三浦の左右を聞。六月十八日。國へ歸る
 八郎次郎小嶋を城より。らへる。大永二年富士山
 燒く。烟ハいあ。より。國より尋の船より。歸帆

此時女二人國へ出敷同三年八郎次郎名哉式部と
 改むとあり又長戸路七郎左衛門尉真定ハ真隆の
 子なり大永七年北條氏綱の命より兵士十五人
 歩士二十人ふくむ八丈代官とあり渡り死七月
 九日八丈ふて病死せしははその子七郎次郎真純
 を直ニ代官とあざせ渡海し赤吉村ニ家作りて
 住し淺沼平次兵衛正知の女を妻とて男子三人
 あり永祿七年氏康の命にて歸國をへりよ申來
 又けふ如何なる事や六月十八日八丈ふて自
 殺したると家譜に記さる然れハ早雲の領とあ
 り明應七年よりふして朝比奈らちめて見

出きしハあらがれぬり金川宗麟といふハ誰や
 りハみや武列神奈川に住き人と聞ゆ
 長尾左衛門尉景仲武列神奈川邊を領したる入
 道して俊叟昌賢宗麟大居士と云と長尾古系圖
 みに記さる寶徳二年上野群馬郡白井に宗麟寺
 を建立しけふ今ハ双林寺に改むといふハ
 丈嶋を領したる宗麟ハこの長尾入道からん
 長尾景仲入道宗麟ハ次郎左衛門尉景守の嫡男
 なり管領上杉安房守憲實の家老にて大小事を
 べし景仲入道宗麟に決て永享八年信濃國の小
 笠原と村上と確執し及ひけふ時鎌倉の持氏卿

ハ村上を援玉ふへとて既ニ御旗を出されけ
る也昌賢聞て管領安房守小説く是を諫めける
乃信濃國を京都御分國なり小笠原ハ彼國の守
護なり村上を在國人なり守護の進退を受以却
るこれニ對捍する工其罪かるから以是を助け
玉ふんと京都へ對し以の外の工と申上しを持
氏卿怒て管領を誅伐あるへと思召立玉ひ
や永享亂の胚胎と云へ持氏卿の自殺憲實の
出奔結城の合戦永壽王丸を鎌倉に還し入奉る
まへく此入道の意計又出たり永壽王丸元服し
憲忠を誅し關東再度亂るく及く以入道の

奔走亦かありとありへ寛正四年八月廿六日
卒

板部岡越中守融成入道江雪の八丈へ渡りしとき
伊豆國賀茂郡妻良の村田久兵衛門又ハ平右衛門と云
者江雪に從ひ行しか本國へ歸りしの際八丈の工
を詔りて嶋戀にかのりしと涙おとしけるを見
るもの聞みの異しとむり丹波少將成經平判官
康頼俊寛僧都鬼東る嶋へ流さむる三年を住日び
しともいふ非きや夫其方八丈を戀しかふと
いふも不審なりとあわれびいやむる八丈を
知ぬ故なり彼嶋の女を家の主とかし男のむべ

入婿おふみ日本人を貴むらふら我等の鳴の
奉行たる江雪入道との被官と云を以て鳴の長
の取持ふくその一族たる大家の婿となりたりや
かゝ女房をともふ色白くして玉の光りいさぎよ
く髪長くして翠の艶うるち顔やち世に類ひ
かく手足のまのまやせらく匂ひふらく美目とよ
優かるのまらば上品の絹をかさね着ておさ
絹をたくましく帯をかきり打見まの天人かとあや
まされたりあものいふをまけの聲のどやろみ花よ
あゝ鶯をかきおらば迦陵嚩伽とやらハ聞ねハ更
み知よ一形一御更衣といふともハハハハ是ハハ

増るへき

一男をハ太郎二男をハ二郎三男をハ三郎四
男をハ志やう五男をハ五郎六男をハ六郎七男
をハ志のあやう八男をハ八郎九男をハ九郎
といふ長女をハふよこ次女をハナカ三女をハ
テゴ四女をハクス五女をハダイロアツバ六女
をハクウルウといふ女をハニヨゴ又ハアツバ
といふ下女下男をハヒツクワンといふ大をハ
ボウゲといひ小をハネツコイと云速手正をハ
アミと云とぬる絹の長さ一よことハ八尺法一
四十筋あり一尺といハ八尺ぬる法一よことハ

鯨より六丈四尺形。一端より四尺形。三
 丈ニ尺まゝ一盃といふ。京升の二合五勺ごしやう子當かた
 一升といふ。一盃いふ。十四なり。京升の三升
 五合ごがひ當かたる其一盃といふ。一度の食料より云
 とふやあらん。甲斐國升まゐより一盃ごと云
 七合五勺なり。即二合五勺ごしやう。三度分形
 我身を足れば色黒く骨太ほねがと髪縮かみちぢと鬚ひげいりて見
 處ところねいりね宿縁しゆくゑんも此女と夫妻ふうさいあり。小夜
 の枕まくらを交まじへ中ちゆうと形かたちけるふやと氣きも魂たまも身みも添そ
 ぬまゝ。やゝ夢ゆめかや夢ゆめからは醒さかん後の悔くい
 の何なにからん恨うらみもいさゝか逢あか何なにといとやうと。

やゝ思おもひさへし時ときよる主ぬしの女房にようぼう出來きり
 今宵けふの御塔みづた入いりまゝ嬉うれし打笑うちわらひ愛敬あいけいのま不ふと
 やつ。母ははの後のちより添そて物ものもあつたる有様ありさまの
 譬たとえを取とり縁ゆかりもかゝとかくまは不ふと。盃さかずきの數かずも
 つゆり主ぬしも娘むすめも醉よめたれ。寢屋ねやも入いらふ。八段はつだんの
 けの夜のゆの。後のち重かさとかく。志こころもやさね。南柯なんかの夢ゆめを
 結むすひとゆふ。鷄けいの聲こゑも聞きえ東あづまの空そら赤あかくふる。あ
 り起おき出でる。此家このうちの一族いちぞくの女によ立たかたり入いり來き
 り。御塔みづた入いり。けか。別わかれ。御國みくにの殿とのさむ。あ
 り。禮義れいぎも。土產こゝろを送おくり。ゆゑか
 と此國このくにも。見みる聞きせぬ。おろ。我われの天女あまのむすめの如ごとく

女夜明さの縮糸をよりまぐらあれを染るま五
 月より七月まぐら三月九十日の間まかりやまを煎
 三十七八遍染山茶の灰を灰汁みたて色を
 出せばゆやくとたふ黄色とぬる又黒を染る
 何時といふとぬる推の木乃皮を煎して廿四五遍
 そめ染上りてせいの程を考へ田の泥み入る色は出
 くとなり樺色をば秋冬の間菌挂の皮みて三十遍
 らかりこれ代染そのち山茶の灰汁まぐら色を出
 くとなりまぐら乃業を疎みせは朝暮心を用ひ我
 壻君御歸國の御土産ま一端まぐら餘慶ま持まら
 を以て女の手柄ときふといへり

八丈嶋を伊豆國賀茂郡住人朝比奈六郎知明と
 いふ者見出し早雲へ申上げかまより早雲大に
 悦ひ此嶋を見出したる賞とて豆列下田郷を知
 明と興えといふ知明の子孫兵庫助と云その
 下田を知行と云又是は上よ見え圓明のま
 聞の長戸路七郎左衛門真敷その子真隆その子
 七郎左衛門真定その子七郎次郎真純と四代相
 續きその七郎次郎永禄七年自殺せしより板部
 岡又渡きかろへ長戸路の家をてみ代官を
 停められしよりその子と母の氏淺治を称
 しけふか真純十七代收蔵某の時より長戸

路も復したり

重修真書太閤記十一編卷之四終

[Faint, mostly illegible handwritten text in the right-hand page.]

重修真書太閤記十一編卷之五

北條家行儀の事

并福嶋伊賀守乃事

早雲入道元來伊勢伊勢守乃庶流たぶら故に將軍
家殿中の故實に練熟しつゆとひのひよ及も以既
み豆相を合せ一萬四千二百五十町餘を領し正統
三十五萬六千二百五十餘石の藏入あは侍の負
千餘より千餘人の侍みの組頭二十人小頭十人
侍大将五人を立ち作法なれ侍大将の一人して
二百人を支配し小頭の百人を預り隊頭の五十人

を引廻さへし是よ於て隊の兵士品の者隊頭も遇
る途中の禮あり座上の禮あり殿中乃禮あり隊頭
も遇て斯々といへり小頭より如何侍大将より何
何主君より夫々と禮儀三百威儀三千こむの
かみ途中と座上と殿中と三種の差別ありい
や御禮の式も若君御曹司へ出仕の禮御裏御上へ
伺公の禮一門衆へ参上の作法をせ後許の品々そ
や我のやうに或老人乃かくはを聞よ北條家よ
ハ殿様上様若君様これを御上通りと申次とかや
はくとの次の御方様大方様さ々の向々の御方々
御連枝御曹司の品を知へし御所をハ屋形と申へ

くだとへり小田原御屋形早川の御屋形葦山様を
ごり申さる

殿をのとの訓の火處主の義ありホドをのへべ
きを上略してトせいの又トせ云へを代下略し
て又せいの合せくと又せかるあるひの處主お
又といのり聞えされと老女をトジせいのを以
てたのへり猶火處主の上下略といのを善とを
へし老女代トジと云トハ火處をうじハサキの
約なり老女おせば火處栄の義ありトジといの
なり猶熟思を教よ人家より取て火處より貴を如
あるへり然して此火處の主といの家主

みしてこの火處を弥栄えま栄えまはふそのま
 家主の妻おろ困て家主を火處主と云其妻を處
 栄といふおろ後又關白の妻を政所と云大臣の
 妻を御臺所といふ同く火處榮よりうひは
 詞と知へし政所の略語なり具にいそんみ政
 事所と云へし田舎みしセイジ云へ臺所のと
 かり又船みしセイジ云へる飯焚處なり
 田舎の家みし母屋は火處あり是火處を家中の
 主といふ所以なり
 其次は小田原の政事正しく民をかぐあを授ま
 一不どは近國他國の人民めぐらま懐き家に移ま

津々浦々の商人ましく西國北國よりむらが来る
 みよりむら右大将頼朝公より以來三代の將軍
 北條九代執權の時といふとり是みし争て増るへ
 手東は一色より西の板橋に至りてその間二千百
 六十間見勢棚をかき暖簾をかけたる是は買人
 の足を停めん不ど日よ照さゆ風はあらんを
 心憂しと思ふよりかくの設けのからめ山海の
 珍物を異國船の載來るこ平戸博多の津よりし
 昌し錦繡綾羅をちめ縮紬縞紗のいろく京の西
 陣かへつゝ寂寥たり唐紙師藤兵衛は三十五貫文
 の所領役をいしく綱廣ちめは正廣と名乗るか

氏綱より一字を受て改めしとかや此時對馬守に
任ぜしあり是天文八年の事といへり

正廣ハ正宗の末子なり長子を藤三郎行光と云

その次貞宗その次廣光その次廣正その次正廣

なりといふ貞治元年より明德二年まゝといへり

二代正廣ハ應永の初あり三代五郎入道と云

四代ハ永正の頃なりその次の正廣即綱廣なり

その次ハ河越番匠といふその次ハ大工

三郎兵衛五郎三郎といふハ鎌倉からび玉繩

て知行を宛行とれたりその次ハ大鋸引藤澤及

豆刈奈古谷とありその次ハ切葺といふ屋根師

あり青貝師あり江間藤左衛門左右師孫四郎圓敬

齋縫誥神山奈良弥七黒沼いひとも給地あり

石切三人豆刈奈古屋みく給地を渡さふ次ハ江戸

鍛冶同番匠と云ハ淺草みく知行を充行るまゝ銀

師八木といふありあは小田原大判を吹しそのと

知らぬ

小田原大判といふハ銀なり長五寸二分半弘三

寸三分弱上ハ永樂とありその次ハ菊次ハ桐

下ハ拾貫と記し永樂の字の左ハ相列と何り裏

ハ光春吉則と云字あり永樂十貫ハ金十兩の價

なり天正十五年十二月十三日の買物帳ハ金五

夕七貫百五十文入うはと何り是金一匁の價一貫四百三十文と知へくまゝ金四匁鳥目五貫六
百文とゆゑるゑり是みくハ金一匁一貫四百文
みあゝは前の法より三十文界ハ金の位よる
かまゝ金一兩六貫三百文とあは此六貫三百文
を二貫四百文みく割ハ四匁五分の金を一兩と
いハぬり因て十貫文の金を考ふるハ九七匁一
分四釐奇ハあゝは然らば沙金七匁五分を永樂
銀大判一枚と易へ鳥目みくハ十貫文即銀十兩
といハぬりあらぬ
三嶋の紙漉鎌倉の結桶師笠木師經師いびきも知

行給なりこの時町の奉行を小泉といふこの小泉
のめしへ京より外郎といふの來り種々の合藥
をうは中みり透頂香といふ靈藥あり長生不死の
藥ありとて氏綱へも奉る氏綱小泉み仰らせ外
郎を城中へめさせその效能を聞たまふハ唐土仙
家の秘藥なりけふ外郎ハ先祖あを傳へ大覺
禪師み從ひ日本へ渡りていと申みより小田原
屋敷を賜り住居たり

京都將軍年中行事ハ正月七日外郎御藥獻上十
二月廿七日外郎トウケン香五包と見又國花
万葉記山城の部ハ京都西洞院錦小路下ル町ハ

二位杏林外郎透原香とあり

氏康武勇の大將たること世周くこれを知とり文
林の常々尋常と勝つてこそ知れぬの寡一或時氏康
高樓の上又涼く居たまふその折しり庭の木立の
かげよあさる孤かうくと鳴て過たり多かと氏康
とありあそび

夏はそひの寝よかく蝉のから衣己くう身の上よ
と詠したまひそのまゝ盃とつて終夜酒ありし玉
ひしとおり曉るる時を告るもの見廻りける序
築山の蔭よ孤の死し居たまふ見付て申出しとね
り又武藏野よ出陣し玉ひひか時柳嶋といふ処の

松の根み旗おし立たむひ

旗たて昔を松り知らぬや風も靡ぬ草り木もか
と詠しあひしとかやこれを見あらしひ松田孫太
郎佐藤四郎兵衛高橋將監笠原能登守鈴木兵庫助
かと詩歌よ心を掛京都より和歌の達者を招請し
合戦の間よこれと翫ひけかる曾我の里劔澤
の藤見よまかりる横井勘助時同

瀧水より影も志る行松よあさるて咲る藤浪
朝倉右京進元能

袖ふり春やあさるの花の香も忘るる咲る藤浪
松田孫太郎元秀

浪たぬ御代の春をや惜らん松よのまは藤の花房

佐藤四郎兵衛清長
藤の花むしを問の紫のゆゑの色々深めてぞぞ

高橋将監照元
藤の花山の山里に誰をか心しとや待てはきん

笠原能登守鈴木兵庫助と此花見はくつかはと

あつて漏れか能登守
おのゝとち花乃たつと深めてや藤咲里に袖を連ぬ

兵庫助の雨をおひしてまへの日は態と見も行て
諸とりも問ぬ吾れ藤の花恨むる雨のふりまきあつ
と詠しけふとかや又嶋津長徳軒成田下總守の連

歌を好きて花の下の宗匠呼下し又ハ月次の詠

草を京進きしと有となり難波田與太郎春日兵

庫助吉田新六郎中條出羽守ハ數寄者もく月の夕

雪の晨朝あまひハ水鶏のおくころ郭公のほそ入

時かあらびよびかゝりて思ひを暢ける中よも嶋

津長徳軒と武藏國豊嶋郡千束の郷に知すくして
住ちりけるも我こそ隅田川の入江かけける知み
く蘆葦まこりかど生あびて物はひしき処かる
入浅草寺の近けしは思ひの外に人あり繁く松を
登りて翠の瓦まこりおのりし由出仕の度よ
かゝりけるみより氏康朝臣隱居の後觀世音參詣

の序入立寄玉ひけるに長徳軒を小鷹狩に出し
くあらけく内くも形をのぞくと氏康朝臣押
て入たも入て庭の内かと見廻り給ふは大きなる
池ありその池は柴橋いと危ふけは打渡りたり渡
り見給へは少く高き処あり上るははけく隅田
の川舟ありくく思ふに登りてのば
櫻楓なとらふせをまぐく植てその林を出せは廣
ひろくちふ野邊は蘆葦かと青々とまぐりたる
中は草葺の廬ありて主をえんば如何なる人の隠
れ家とすのくく釜のたぎ音まとも松風よ
かよひく心もまむくやをら障子を引あけ入て

見教よめの古し様々の調度引ちらりたる釜の下
入茶椀茶入茶筌ふくべの霰かどまぐく有へき様
なり氏康朝臣爐の下に坐してづらり一服點して
飲とをほあら主人長徳軒歸り來り嚴く敬命し
主設とんと小綾のいそをあるを氏康朝臣より止
め今宵の月を愛むやと宣ふより然るべしとて
その用意し池の舟は棹さし藻の花をかきわけつ
ゆけはいいし川み出たり此川秩父郡の山奥よ
り流せ出るなどを盃を浮るをかりゆ々やうか
れと横見入間の郡を流せ足立豊嶋の堺にいとて
ハ船からでる渉るべき様かきまぐく廣く深めた

ふく此わくろみくわ川の廣ぎ七八十尋みおよび
たり船川の正中入りくは壱月まで東の梢に昇
りかば金の浪あともかり謀まされたり長徳軒
盃とりく此夜の會まれあへく此處に此會ま
稀あるへく御着わかかと打つてふく時は川下
り来る船あり船頭をかくと見知たふくや掉を止
めて進まぬと長徳軒遙に見付やよその船を何の
船ぞ釣船の漁船かと問ひ三尺の鯉はり得てはと
答ふそそ不くと思ふ処なりいでいと云ひくその
鯉とりて膾とかり汁となす瓢の酒を汲かき一夜
深くかふよく二月ハまじり澄わたり遠かり子鐘

の聲聞けるそ指折りのみとは既に曉ちかり然
りと本の水路を漕めくらし芦の一村志げは
中と掉さしり不どもぬく長徳軒の庭の面に出
たりかよみの遊ひまへ有まると供ある人々實に
仙境に入るかと思ふと故人乃いひける是如此境
のとあるべくと人々か詔を傳へたりありから
かくの如く風流よのこり教よあらは又正月七
日射初の式鈴木大学頭をとり能射の面々参向
大将の御前入於る五度十度の作法まべく兼倉
將軍の故實を傳ふ八日ハ鉄砲始なりまへ犬の馬
場といふハ長五十間ハ横三十間ハ構らるる射手

ハ鳥帽子直垂馬より犬ハ二十足三十足 矢壺を
吟味し矢數を争入島津家の藝流れ久しく傳へ
たりこれハ武士の専門ありさの名譽といふべ
しるハ殿役者ハ今春源七保生新九衛門大鼓ハ
三谷大藏仁助威徳三郎四郎小鼓ハ美濃意樂宮増
弥右衛門今春權助大鼓ハ奈良新八五野井笛ハ彦
兵衛助三郎狂言ハ鷲大夫こと等ハ小田原子家造
マシて藝を施しけり又佐藤ハ大鼓ハ山室ハ小
ゆいハ霞齋ハ大鼓三浦ハ住し業を治しハ嶋屋
父子ハ八王寺ハ宿をりハ八列を廻りて勸進能
をなす茂谷ハ品川ハ住して謠をおし暮松大夫

ハ江戸入住て神田明神の神事能を勤む是ハ明神
の託宣より毎年九月十六日ハ執行せし大永
四年正月十三日江戸の城主上杉修理大夫朝興北
條氏綱ハ攻落さし川越へ引退さしハ本丸ハ
畠永四郎左衛門二丸ハ遠山四郎兵衛香月亭ハ太
田源六兄弟を置きたり然るもその年の合戦の最
中といハ殊ハ九月ハ所々の軍ハ暇なく同五年ハ
舊例の如く神事能と暮松大夫ハ仰付らば是
を例とて隔年ハ執行ハせしなり
大永五年ハ乙酉あり今ハ至りて神田の神事酉
亥丑卯巳未の年ハ行ハせし然ハ大永五年

より三百三十五年相續なり

是みはぐさく小田原の繁花あると日みやり月々
 み盛かりしか諸侍の衣裳着より上下小袖の品々
 まぐ小田原様とむくともや一殊は男は鉄漿を舎こ
 老若ともみ齒の黒き侍ありと賞習をふとみか
 りはればいさみやひして忍みとも在郷人とも是
 成れば馬より下る敬屈をそのころ伊勢備中守
 山前紀伊守福嶋伊賀守と三人の武者奉行あり
 備中守の堅固の良将みして智略をくまたりかり
 そめのとまぐ心を深く用ひをきは聊尔も楚忽
 か山前紀伊守の元來武勇のまぐさくはより心

心剛は氣も猛しは是はあれは從入若殿原いつれ
 り武邊をたしかめ髪を洗ひく名香城焚し朝
 夕行水し身を清め死してのちの美名をぬがひ
 生て更は榮耀をいよ福嶋伊賀守の手のこの
 とくハ弓矢の取様甲冑の作もまぐ心をあめて用
 意を止は太刀も刀も尋常は越へお軍法は鍛練
 したまへ我寄子の云子及む組のめのまぐ一様
 み鬘の作りも髪のをぬ殊は目またち出立ちり

重修真書太閤記十一編卷之五終

重修真書太閤記十一編卷之六

北條家臣智者仁者勇者乃事

并寡婦鯨男誣詔の事

福嶋伊賀守まきとくれたふ大男ふして鬚黒く勢高し出仕の装束長柄の刀は腕貫うらてまきとせり何り短刀の柄を赤糸よて巻時り何り虎の皮の尻鞆を時り何り然まとも勝れらる武邊覺のみのかれハ上入もこれを咎めまら傍輩も更は是を怪敷といろく一年小田原久野宮の祭の日諸待大將物頭衆ハのまき見物入出たり伊賀守も見物

きぢやとて牛の角に金箔をくく。茜の大總鞆も茜
の手綱をほけその身の腰に鎌をさし。後向み牛の
けり草刈の躰もやい。尺八を吹十七八と足踏る
若く清げある女。紅の帷子にせ拵枝笠とて先の
せがりたふ笠をかゝりや。牛の張綱をとらむ十二
三の力者も長刀かゝけやを。祭の跡も付て見物
たり

拵枝笠との紙を以て造り富士形もしたふや十
二の帖きて端を折返せば拵枝の花の如く反て
見ゆるより然名はけたり。寛永の末まづも此笠
流行せしと。我の頃の繪も往々見ゆるなり

かやうに異躰の風流をなして。伊賀守と伊勢備
中守山前紀伊守を。旗本乃武者奉行三人と奔走
せし不どねとは誰あつ。是を答むかそのも形
こと自然小田原の亡ふべき。瑞相と後み。おのひ
合されたり。はとともこの伊賀守まよ入尋常の人
みよ超きりけり。あふ年相列馬入の川もく鶉を遣
ふその小田原へ参上し。近平程より。此川も異様の
その出来も人を取らよ。漁獵かせぎのみの難
儀仕る由を訴ふ。伊賀守聞てその様あるもの。稼
を妨げらる。とま。云甲斐あられ。伊賀守退
治して取まへき。かると。中間一人召連馬入もい

たうく・鷄をばり・小然るふ何とら仕ちうけん誤て
中間水中へ落入ちうらう・や時を移せとゆ・浮こ
出以伊賀守まの癖みのよ・遁まよるとて・股差の刀
を下帯みさう・水中ま入て・ミル何とゆ知ぬめの
何・眼の光まはまらうらう・伊賀守の中間を喰
小伊賀守刀成抜て走わらう彼めのや弓手の股ま
引わらう連けらう五刀はらうかび少弱てんえ
けるや猶後刀さく不どみ川水紅まありて・浮こ
上あま何あるものぞと・能見まば長七尺許おる鱸
おるこのや但中間の終ま死たりとあり是等
も非常の怪事といふへ・好事り無まの如比とい

つり物やつか怪異な於ておや

鱸古事記入須受岐とあり出雲風土記万葉よも

この大あるもの三四尺ありては

又伊豆國加納村の地頭清水太郎左衛門康秀と云
みのあり後みへ上野介といふ關東無雙の大力あ
りその妻まら夫ま劣らぬ力ありと世ま許せんつ
也とゆいくら許の力といふとを知まのち然る
小宿願のよありて妻女加納の山上氏神の社へ参
詣しけふ途途中の坂みく穀物二俵付たる牛の伏
居たるを見はけいさるるとみやと休のぞくみ
跡足二の谷へふと落しゆるが岩角ま俵のつり

留^{とま}り^る形^{かたち}荷^に繩^{なわ}を切^きり牛^{うし}谷^や底^{そこ}へ落^{おち}て忽^{たちまち}死^しすへ
 然^{しか}とて引^ひ上^あへ^る様^{よう}かあ^ら牛^{うし}主^{ぬし}あ^らき^れ惑^{まど}ひ^く
 居^ゐた^る体^{てい}勿^なく^いらん^やう^りも^なり^し清^{しみず}水^{みづ}を^つ妻^{つま}あ^らせ^て
 きてあ^らせ^れる^の情^{なさけ}を起^{おこ}し助^{たす}けて見^みる^をや^と思^{おも}ひ^け
 せば當^{あた}り^の人^{ひと}を^の除^のけ^り只^{ただ}一^{ひと}人^{びんご}傍^{かた}へ^{より}俵^{たわら}と^牛の^額
 とを中^{ちゆう}に引^ひの^こう^う引^ひ上^あた^るか^ば牛^{うし}助^{たす}め^りて
 荷^に主^{ぬし}歡^{よろこ}み^と限^{かぎ}る^か二^{ふた}俵^{たわら}の^穀物^{もの}の^三十五^ご六^む貫^{かん}よ
 過^まざ^れと^牛の^百貫^{かん}目^めも^餘る^へ是^{これ}を^中に^引上^あり
 と更^{さら}に^人間^{にんげん}の^業と^おわ^られ^はと^沙汰^たし^けり^此女^{このむすめ}
 の^腹に^男子^{こゝろ}あり^正次^{まさつぐ}とい^ふ太^た郎^{らう}九^く衛^ゑ門^{もん}尉^ゐの^名を
 法^{はふ}駿^{しん}河^が國^{くに}長^{ちやう}久^く保^ぼの^城主^{ぢゆう}たり^後の^是も^上野^の介^け

と^いふ^數度^どの^合戰^{せん}も^高名^なを^顯る^る大^た力^{りき}無^む雙^{さう}の^勇
 士^しと^世ま^かく^れる^甲斐^ひの^大黒^{くろ}と^いふ^谷馬^{やま}を^持
 たり^此馬^{このうま}一^{ひと}日^ひも^大豆^{まめ}一^{ひと}斗^とを^食み^尋常^{じやうじやう}の^人衆^{しゆうじゆう}あ^ら
 かり^厩の^出入^{だにり}も^中間^{ちゆうかん}六^む七^{しち}人^{にん}と^て網^{あみ}を^附て^出
 り^然る^も太^た郎^{らう}九^く衛^ゑ門^{もん}尉^ゐ此^{この}馬^{うま}を^打の^り進^{しん}退^{たい}曲^{きよく}節^{せつ}自^じ
 由^{よし}を^盡く^し馬^{うま}場^ばの^り堅^か場^{じやう}も^至り^聊も^意を^従ら^ぬこ
 り^小田^お原^{はら}に^朝入^{あさ}駿^{しん}東^{とう}郡^{ぐん}長^{ちやう}久^く保^ぼを^發し^かみ^りを^小
 箱^{はこ}根^ねを^升丁^{のうら}に^小田^お原^{はら}に^參着^{まじ}り^公私^{こうし}の^用を^とり^のへ
 暮^くも^長久^{ちやうく}保^ぼも^かへ^る此^{この}道^{みち}廿^{にじゅう}餘^{じゆ}里^り日^ひを^重ね^て更^{さら}に
 疲^{つか}れ^し体^{てい}も^弱り^太郎^{らう}九^く衛^ゑ門^{もん}尉^ゐふ^くく^をこれ^を愛^{あい}し
 い^くく^り乗^{のり}け^るが^いり^も氣^き性^{じやう}の^轉し^てや^あら^ぶ日

太郎左衛門尉乗とこのあゝ馳出いけふを手綱を
以て何らふといへども更は止らばまき引い
けくかハ太郎左衛門尉勝みく一め急度志め
付あまは立処血を吐く死したりけり又佐竹と
對陣あまける時太郎左衛門尉黒絲威の鎧ハ幅
四方の大さゝのめみ岩手月毛といふ馬のり一
丈あまのり乃楳の棒茂八甫み削り鉄の筋金入たふ
を以て敵の中へ割て入弓手馬手み打拂ひ當るを
幸ひ叩きたくし不ごみ一拂み五人十人泣くうち
むしぎいかバ佐竹勢忽は打崩されしといけり清
水う持し楳の棒ハむり上杉憲政の住たマ上

列平井へ氏康の押寄たゞ時上杉方より荒井傳
八と名乗てふし繩目の鎧を著し黄瓦毛の馬み打
のり徑一尺とけり形る大鉞を以て片手打み打た
てしハ北條方多く甲の真甲馬の平首ふと処を
嫌く切ららひ薙立し不ごみ氏康の旗本をてみ
崩立しとせし時福嶋伊賀守この楳の棒を以て
傳ハふらゝ又向ひ討ひらゝ上段下段半時あ
まり戦ひしハ勝利更は付伊賀守ハ大力の
早業あれば棒をさゝの馬も人も只一打とらち
けふを傳八碯と受留しハ伊賀守傳ハ持たる
鉞の柄を奪ひとらんと拈合ける有様あまおとみ

金剛力士の如くおつ互人み知むたる勇士かれ
 一交りせび引合けるが終は真中より捻切鉞の
 刃へ伊賀守の手みこり柄を傳へる手は遺りた
 直して撃んせし如く横井越前守荒井馬を射た
 又けふみより傳へるみて討れたりしおつ軍
 んどりのち伊賀守此棒を清水の許へ持参し其の
 此棒を授くべきめの御邊より不あるべらんと
 て譲り如とかや本の主の鬼神を欺きし福嶋伊
 賀守おつ如々の合戦にいひり此棒みく手柄を顯
 ちとて挙てかぞへるら以氏政氏直兩大將こ

の清水の力成志らむやと思われ枝の口より八寸
 餘の鹿の角二の投出しこを以て興あふ様は振
 舞へやといふれけふより太郎左衛門尉前二の
 を一の握こひいと握むハシと碎けしを九
 右へ引裂たり兩大將をとりめ満座の諸士の頭
 何れも舌を振ふこれ成感とたり又北條家子一
 本傘二本傘といひしやや或時房州の海賊船
 五六艘小田原の浦手へ寄來りて町中の上下
 騒ぎ立取ものも取あえん濱手へ走出けふちよ
 二本傘のさしやの侍一陣又進と大音聲
 入名乗る様是の相摸國の住人高山大膳なりを

舟漕よきく勝負を決せよとをめすはくぐとのへ
ども更なるの船よきよせんともせし折ふく小兩
降出しかの誓願寺の庭林といふ僧からかきけし
足駄と見物衆よまきせ居たる々か高山の名
乗をきして興あるとよおりの同しく打並て大音
阿げ一本傘の法師武者を如何かおのと思ふぞ
やかくドけなくも浄土宗の大知識誓願寺庭林大
和尚との我事なる敵み取て不足あらくとも漕
寄よとせし招けの海賊船みて是を聞けし小田原
乃庭林和尚との聞及ひ知識ありけしとも漁獵
のためみ出たる風風のおりてあつ追よきか

とば法談聞てり布施の用意かしくも漕返し重ね
て参詣をへきなりといふより早く我おとらくと
漕返を是をさく高山といふ馬を浪打際よかけ
ま返せしと呼ぶといへとも元より軍船よあ
らねば漕はし海原の雲井遠くかくれありけし
こそ一本傘二本傘の噂へ高く聞えしなり又三浦
三崎の浦へ南京船漂着しけかとも三浦の奉行安
藤豊前守これぞ小田原に注進しけり氏政朝臣の
下知として載來る処の綾羅錦繡をくめ種々乃
焼物沈水香奇南麝香の臙珊瑠璃車渠馬腦以
下その數をびたぐといへとも關東富貴入りて

大問已上編卷六

四五日のうちみ是を買取けふより船主も思ひ
のりふ利分を得たり舶來の唐人當地に留まり
て家業を営まんと願ふのみを小田原より屋敷
を與へぬより未代かけて南京落雁南京おみ
しむどのの菓子も出來唐線香唐木綿すべの唐紙
唐織おのり唐といひ唐といふ物の名を此時よ
にぞとどまりぬすべその頃朝比奈弥太郎とて元
ハ駿河國のものをたりけふ今ハ小田原に在り武
勇の世に許されしもの形はる小田原より濱松へ
使ふおくとく日暮日金を越おけいといふその
とごころ日金堂木下暗く寂寥きよ向をこればそ乃

長六尺もの男かといふれハ髪ふりて白銀の
針み似たり法師かとおもへハ三衣をを着き色黒
くして眼を尋常ならぬが松明取て立ち彌太
郎心中日金山に地獄ありと聞はるけくハ虚
言おてハかありけり此のわき一定獄卒あるべ
然もくも我戰場入て人の殺しはとて我心より
傷しみあらば合戦の場より太刀物具を分捕せ
とハあはれとハ人の門戸を破りて木の實一に取
おとねし地獄の因果を受べき應報かとい心問
ひ心決し進まおけハ彼者彌太郎も向ひ申ける
様憚多き申奈はと下りかより若き女より

以へー急ぎにへ上り待りのありと御傳之給ひへ
 と申し彌太郎不思議に思ひかぎり心得はふよ
 答うらちをぐまば果して十六七のりの女暗き
 道をたどゆへ上るふ逢たり彌太郎其女よむひ
 云々と言べ辱ふきよ申て上り行けふに仇かの
 怪物と行逢ひらんとおりの時大ふさあが聲聞え
 まる物をうち倒さ音志きうありけふを何事あり
 やと怪しめと引返し見届しり奈何とおりのいかり
 麓へ下るふ玉澤のりへ処ふ箱根の關守半田某
 このりへの女十七歳入て死したふを葬るふ逢
 たり朝比奈正直第一の男かとは只今日金入て逢

守のり此關守半田の女幽霊あるへ父關守
 て非常の事ありみよりその女地獄に落しと覺
 えりあふ哀れさけ入聲乃聞えり彼獄卒の打
 し楚の痛さをかかろりかると打倒され音
 多獄卒責らむからんと朝比奈の語るをさく
 のの信ろり彼是に傳えりいと朝比奈彌
 太郎鬼に逢しとゆ又の幽霊をさくるとり沙汰
 のふとなつ後み能く尋せり怪物と云くり日
 金の地藏堂守の僧入るそれが女の麓の里に住け
 るが今宵の父の法師のりへ歸り來るを父の
 法師のむひみ出ひふりその女山路入る山犬

大限言二終ス
不出逢一かば叫ひけふ処へ法師來りて山犬を打
殺しゆるなり朝比奈さる勇士取ととも思慮たり
以かやうの浮説を云ふらさどし口惜きと取ら
まや小田原北條家の外ハ榛原外と云榛原との伊
豆國葦山入早雲入道の居給ひあり升作ありめ
あり京升よりまこ一太形ふめのなり安藤豊前守
是を奉行せりかバ安藤升とゆり
今按み安藤升と云ハ安東升の轉せりなり安東
升とゆりハ伊勢の安東郡なり太神宮領の外ハ
一即令前升あり曲尺六寸四方深二寸五分積
九十寸あり今京升あり一升三合九勺余入

天正十二年十二月伊奈弥右衛門とりふめの此升
の贖を作り罪より小田原芦子川原みて磔
かけら流るる都て此條家の政事淳直入して質村
あり伊勢備中守大和兵部少輔小笠原播磨守松田
尾張守同肥後守山前上野介同紀伊守芳賀伯耆守
安藤備前守板部岡江雪入道十人を奉行とい公事
訴訟をへ十人して是非を決断せ或日上列吉井
と云里の百姓棒みく頭を打割れ血を流したるが
訴人なり相手寡女あり男訴て云我ハ妻あり彼
ハ夫あり日頃密通しハ処女我を嫌ハ外の男を迎
入我を盗人と云てかくの如く疵を受ハ無實申掛

八月己二編ス

十

ひりくはり女御制法くぐはるべくと云女答入我
此男と密通せしとね一夜我家の戸を破りしは
盗人と申てはとりし雙方實らるるに神色變せ
以十人の衆も決りかねる時江雪いと訴訟
とも入理聞えり共證據か何ぞ證據を出し
へと責めかは女志ぐ打案ト取かふらり我身
夫も別れ日より陰處に開葺とり腫物出来て
殊のなり痛むは我を捉へ男女の道おひよら
此男と密會せしとねといふ男いと女的身
入腫物あれども交合の障みおらぬといふその
時女はりと笑ひ我身入腫物か然とも證據と

いと新くみより態と虚言をかまへるはといふ男
大み驚き忽ち色を變以因て男は盗人み決せら
繩をかけ獄に流さか女は理運して家みかへ
されしとなり

大階言十一終卷六

十一

重修真書太閤記十一編卷六終

慶應戊辰

重修真書

